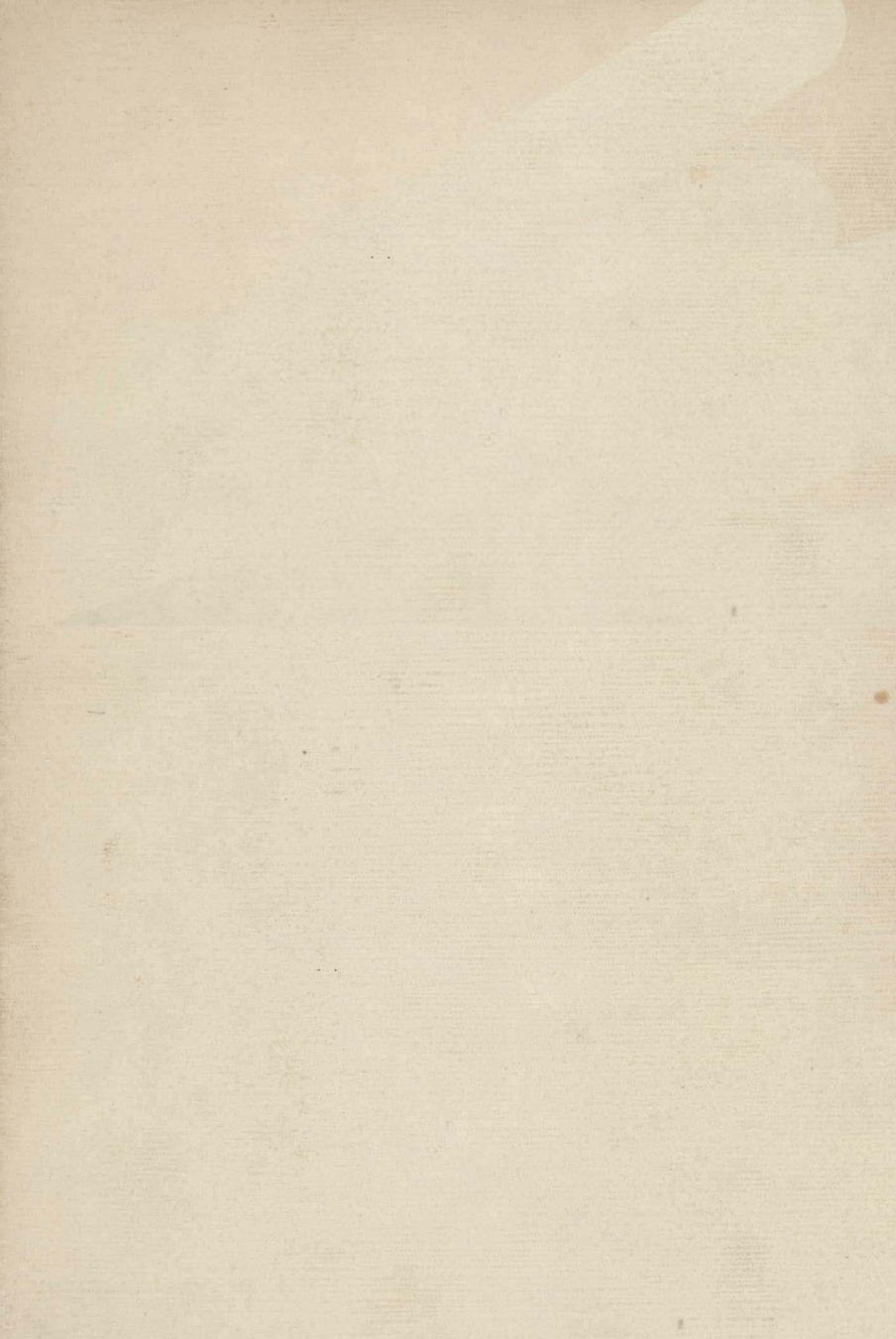




さかのぼ
万葉を溯る

—柿本人麻呂をめぐって—

玉城 徹



万葉を溯る^{さかのぼ}
 一柿本人麻呂をめぐって一



昭和五十四年六月二十九日初版発行
 昭和五十四年八月三十日再版発行

著者 玉城 徹

発行者 角川 春樹

印刷所 東洋印刷^{株式}会社

製本所 宮田製本^{株式}会社

発行所 ^{株式}会社 角川書店^{てん}

東京都千代田区富士見二ノ十三
 振替口座東京三一九五二〇八
 電話東京(箱)七一一(大代表)

郵便番号 一〇二

落丁・乱丁本はお取り替え致します

0095-884042-0946(0)

万葉を溯さかのぼる——柿本人麻呂をめぐって

装丁
柴田長俊

まえがき

柿本人麻呂は、はやくから歌の聖ひじりとよばれてきた。それは、何故であろうか。人麻呂崇拝の長い歴史の大部分が、伝襲的な、偶像礼拝式のものであったことを、今日、疑うものは、まずいであろう。しかしながら、歌聖、人麻呂の名がまったくの虚名だったと信ずるものも多分いない。歌聖の名が冠せられるだけの実質が、たしかに人麻呂にあったようだと漠然と考えられている。簡単に言うなら、人麻呂は名実ともに大歌人である。しかし、何ゆえに大歌人なのか、その理由が必ずしも十分に考えられているとは、言いがたいようである。その作品が立派だというだけでは、答えにはなるまい。彼の作品は、いったい、どのようにすぐれているのだろうか。

このような問いに答えるためには、どうしても、自分自身の眼で人麻呂の作品の「読み直し」をしなければならぬと、わたしは心づいた。もすこし厳密に言うなら、万葉集中の、人麻呂作歌と、人麻呂自身の制作にかかるテキストである「柿本朝臣人麻呂歌集」の歌とからなる人麻呂の全テキストを、現代の立場から検討する必要があると考えはじめたわけである。それにしても「読み直す」とか検討するとは、どういう意味かという重大な疑問が、ここで生じてくることを否いなむわけにはいかないだろう。

「虚心」に読み直すことが肝要なのであるが、その「虚心」とは何であろう。人によっては、逆説だと言うかもしれないが、「虚心」とは、主観の純粹なはたらきを意味するのだと思う。すなわち「学問ウィルキニエーリヒの客観性」なるものを、ひとまず、すべて投げうってかからなければならぬのである。しかし、これは恣意ウィルキニエーリヒ的ということとは大いにちがう。ある厳密性が要求されるであろう。「学問」というものが、現

実の対象を解明するためと称して採用している、あれこれの超越的理論を、できるだけ排除してゆくべきである。そして、その対象がわれわれの情念に対して、直接はたらしかけることのできる「力」を、直視しなければならぬ。このような方法を、わたしは、それが非学問的であるがゆえに、かりに「悪虐」とよんで、わたしの出発点とした。

近代以降の人麻呂観を批判しながら、わたしがまず第一に拒絶しようとしたのは、個性（人格）という虚妄の形而上学である。この信仰は、人麻呂の個性があつて、はじめて、人麻呂の作品が存在するという因果論的理解に固くしばりつけられている。人麻呂の朝集使説から、宮廷詩人説、舍人説、鉾山監督官説、そして最近の高官政治犯説に至るまで、その本質はすべて、この個性理論を基盤とするものだといつてよい。それらの説は、一つの個性が、社会の中で演ずる固定的な役割を明らかにして、そこから人麻呂作品を読もうとするものであつた。

これに対立する極端な考え方は、個性を抹消した人麻呂複数説である。これまた、わたしには、一箇の超越的前提として受け入れがたい。それは、作品の直観的、内的な観照を不可能にする点において、従ふことのできぬ考え方である。ことに「柿本朝臣人麻呂歌集」のごときテキストの制作を考へるとき、巡遊伶人の集団などを想定することは、立論を破産せしめるものと言つてよい。

以上この方向の思考を停止して、「虚心」に人麻呂テキストに当るとき、おのずから、そこに唯一つの可能な進路が見えてくる。それは、人麻呂という統一的な主体は存在したということである。しかし、その「統一」は、個性としての統一とは別のものであるはずだ。それは、作品創造の主体であると同時に、文字的記録のそれでもあり、さらにテキスト製作のそれでもあるような、一言にしていえば、文化的、技術的な主体である。この主体の統一性は、ある文化的な位置に由来するものであつた。

この人麻呂という文化的主体を、作品を通して観察するとき、この主体が、ある特定の文化的季節に

のみ可能であつたことが判明する。それは、古代専制国家成立の一定の——ごく短期間の——政治的段階と完全に符合する文化上の一時期であつた。具体的に言うならば、それは天武期にはじまって、持統、文武朝に至る四十年たらずの間である。

これは、従来、推定されてきた人麻呂伝の常識の外へ一步も踏み出さぬ、ごく平凡な見解に過ぎないであろう。が、わたしは、伝記的に人麻呂の人生事実を追求しようなどと考えたわけではなかった。わたしが問題にしているのは、人麻呂の創造物のもつ直観的内証が、特定の政治・文化的段階の諸特徴と一致しているというだけでなく、むしろ、作品の方が、その諸特徴を照らし出しているようにすら見える点なのである。

特定の段階というのは、諸皇子を軸として再編成された文化技術者たちが、専制君主——天武・持統——の意志の下に、新たな文化建設に協力せしめられた時期をさすのである。この建設の中枢をなすものは、言うまでもなく、藤原、平城両都宮の造営であつた。こうした建設のただ中に、歌人の人麻呂が、その文化的位置を占めていたことは、その作品が物語るであらう。

このような人麻呂について、わたしが、そのテキスト読み直しから考え得たいいくつかの点を左に摘記しておく。

(1) 人麻呂は文字技術者であつた。原始的性格の氏族の一つである和珥^{わに}氏の一員たる人麻呂は、東漢氏との何らかの接触を経て、文字技術者となつた。その過程で、彼は東漢氏系の輕氏の女で、持統の宮女だった一女性との悲劇的な恋愛を体験する。人麻呂歌集のテキストは、この文字技術と同時に詩歌の言語技術習得形成の経過と、悲劇的恋愛体験との融合を痕跡としてとどめている。

(2) 文字技術者としての人麻呂は、藤原宮造営のための木材搬送の記録の業務にたずさわつた。木材搬送技術は海部^{あまべ}の人々の所有するものだったが、和珥の一族は古来、海部と隣接の地に居住し、古伝誦を

共有―通婚によって―したと、考えられる。人麻呂一代の作品に、随所に海部との濃厚な近縁関係を漂わせているが、同時に、ある時期の彼の活動範囲を跡づける時、それが古代搬送経路との一致を示しているように思える。そして、また、下級搬送工人との接触も、作品から推測し得られる。

(3)人麻呂の「旅」は、こうした技術者として、そして特に海部との関係によって生じた、漂遊状態であつたろう。人麻呂の廷臣としての位置は、おそらく副次的なものであつた。官命を帯びて旅をするという性格を、その旅の歌からうかがうことはできない。

(4)人麻呂は宮廷歌人ではなかつた。人麻呂の諸皇子関係歌は、それらが宮廷内的なものではなく、むしろ、宮廷外的なものであつたという直観的内証を与えるものである。人麻呂は、技術者として、諸皇子と私的なかわりを持ち、そこから、諸皇子への挽歌、または讃歌を創造したのであつた。

東洋的専制権力は、人麻呂の作品をいくぶんか歪曲して、それを専制への讃歌として利用したかもしれない。しかし、人麻呂は無条件に権力に隷属していたわけではない。そこには、ある種の自由が存在した。人麻呂の仕事が専制の内部にあつて為されたものであることが否定しがたく、諸皇子への讃美が、間接的には専制君主への献身に変質し得たにしても、人麻呂が直接的、意識的に専制君主に対して屈從的な讃歌を呈したとは思われない。

人麻呂はたしかに、体制の内部に巣くう寄生者であつて、反抗者ではなかつたが、半面、彼は創造者としての心の自由を保持するだけの抵抗を継続したのである。そこからしか、その作品に見られる厳しさ、鋭さ、深さは生れなかつたろう。

(5)専制の特定の時期―諸皇子の時代―が終焉をつけ、技術者集団がより隷属的な地位に下落してゆく時に、詩人、人麻呂の存在意味も失われることになる。藤原氏が専制権力を手中にし、武智麻呂グループが文化の主導権を握るとき、人麻呂は消滅しなければならなかつた。同じ六六〇年代に生を享け、同

じような文字技術者であつたと思われる、人麻呂と憶良とは、詩人としてまったく異つた運命の行路を歩んだのである。

(6)人麻呂が石見で死んだとは考えられない。依羅娘^{よろめ}子、丹比真人^{たぢのまこと}の作とグループをなす人麻呂の「臨死自傷歌」は、その様式的内証によつて、人麻呂テキストから除外さるべきものと思う。すなわち伝説歌であろう。作品によれば、人麻呂は海路を筑紫に向つた後、姿をくらますのである。わたしは、これを入麻呂の日本脱出行ではなかつたかと想像する。筑紫へ向つたのは、そこから朝鮮へ渡り、さらに大陸を目ざしたのではなからうか。もちろん、この仮説は一つの可能な想像の域にとどまるものである。しかし、文字技術者であり、詩人であり、海部の関係者だった人麻呂にとって、この可能性は、他のそれと較べて、その妥当性においてさほど劣るものではなからうと思う。

以上の諸点を、わたしは人麻呂伝の人生的事実として立証しようと企てたわけでは、毛頭なかつた。ただ、ひたすら作品自身の物語るところを「虚心」に聴き入ろうとした結果、おのずから、こういう文化的位置としての入麻呂の姿がうかび上がってきたのみである。

入麻呂のテキストを、何らかの超越的解釈から救いとして、テキスト自体に還元しようとするわたしの努力は、難渋の多いものだったので、それが、行論にいたずらに複雑不明瞭な印象を与えているかもしれないことをわたしは危惧する。そういう欠陥を補うために、便宜上、右のごとき整理を試みたのである。

しかしながら、わたしの探究の目的は、もとより、論証などにあるのではない。絶えざる方法的反省を通して、入麻呂のテキストに接近してゆくところに、わたしの課題があつた。その意味で、これは一つの文学論的な試みであつて、これまでの諸先学の歴史的ないし伝記的人麻呂研究に対して、ことさらに異をとねえようとするものではない。読者には、よろしく、その点を諒察せられて、わたしが入麻呂作

品に即して行おうとした考究の曲折の跡を、どうか煩を厭わずに、検討していただきたい。

終極的に、わたしは人麻呂の中に、わが詩歌伝統における根源性―根源性とは「根源」へのかぎりない道程の意なのだが―を発見していきたいと庶幾するものである。しかし、その点について、もはや、あれこれことを加えるべきではなからう。わたし自身の希求するところに反して、わたしの為し得たことの、あまりにも不十分であったことを嘆息するよりほかに致し方がない。

この一巻は昭和五十一年から五十二年まで、二年間、十六回にわたって「人麻呂」と題して、雑誌「短歌」（角川書店）に連載したものを、八部に分けたものである。単行本とするに当り、いろいろ気になるところもあるが、たとい拙くとも最初の思考過程をそのまま保存することは、立論の精神から言って避けられぬ必然だから、あえて手を加えることをしなかった。

連載中、わたしを励まし支えて下さった、「短歌」編集長、秋山実氏、板行に当って、諸般の労を取られた角川書店編集部に対して厚く謝意を表する。

昭和五十四年五月十二日

著者

目次

まえがき

I 人麻呂の読み方

- 1 「像」からの絶縁
- 2 子規と人麻呂
- 3 左千夫の転回
- 4 近江荒都歌の論評をめぐって

II 人麻呂の政治性

- 1 いかさまに思ほしめせか
- 2 草壁挽歌の問題点

三

一三

一四

三

元

三

四

四

三

3 「政治性」とは何か

III 文化的位罫

1 告白の章

2 帝王図

3 庚辰かのまたつの年の一首

4 神かみの競かはひ

5 月人つきひと壯子をとこと明あきつ神

IV 恋 愛

1 山河の瀬

2 持統の宮女

3 寂寥所

4 隠せる妻

5 輕の市

6 過ぎにし妹

七

八

四

九

九

一〇

一〇

一五

一六

一三

一三

一六

一四

一〇

V 民謡性とは何か

- 1 浦の浜木綿 はまゆふ
- 2 民謡性をめぐって
- 3 菅の実

VI 技術者としての人麻呂

- 1 有間皇子と紀伊
- 2 藤原宮造営の材
- 3 旅における人麻呂
- 4 宮廷詩人ではない
- 5 壬申の乱の戦闘場面
- 6 香具山の宮
- 7 白水郎 あまとか見らむ
- 8 人麻呂と垂麻呂
- 9 忍壁皇子

一五

一六

一七

一八

一五

一六

一七

一八

一九

二〇

二一

二二

二三

二四

VII 諸皇子の「場」

- 1 「場」の文学
- 2 新田部皇子の讃歌
にわたべのみこ
- 3 名くはしき狭岑の島
さみね
- 4 臨死自傷歌の伝説性
- 5 長忌寸奥麻呂の位置
ながのいみのおきまろ

VIII 抵抗としての文学

- 1 「風流」の争奪
- 2 葬法を中心として
- 3 聖なる島
- 4 千重に隠りぬ

二四

二四

二五

二六

二六

二六

二七

二八

二八

二九

二九

人麻呂の読み方

1 「像」からの絶縁

何故わたしは人麻呂についての文章を書こうとするのか、その理由はじつはわたし自身にも、はっきりしているわけではない。これから書いていこうとする、この文章の全体が、その答えを考えていくためのもののように思える。そうは言うものの、わたしが人麻呂というものを考えていく、もしくは観察していく態度、姿勢、角度、位置といったものは、もちろんある。いや、むしろこう言った方がよい。そうした姿勢なり位置なりはわたしにとって宿命的なものとしてあり、わたしはそれをはなれることができないと。そうした、姿勢と位置とからわたしが見ようとするもの、それはけっして人麻呂像などというものではない。「像」でない人麻呂をわたしは考えていきたい。

わたしは「像」などというものに、いさかも興味をもっていない。それどころか、ありとあらゆる「像」からきっぱりと手を切らないかぎり、浅薄で、陳腐な、そしてへんにパセチークな文学観の汚染から身を淨めることは不可能だと考えている。しかし、話をそこまでもっていくのは、まだはやすぎるだろう。「像」でない人麻呂をどうしたら書けるかというのは、これからのわたしの課題であろう。

そこで、この問題は後廻しにして、わたしが人麻呂を論じようなどという無謀な気持ちをおこすに至った直接の動機について簡単にしておこう。昨年（昭和五十年）の十月、岩波書店の雑誌「文学」に